

COSMOS集



「あすなる集」特選

三ツ矢サイダー

伊藤 祐 楓* 茨城

冬枯れのチェリーセージをほきほきと祈りつつ折る最期の香り
香木の匂いかぎつつ夢に落ち望むは小さき朝の幸せ

風呂上がり吾子と分け合ひほえめはかくまで美味き三ツ矢サイダー
自らに失望したよそんな夜は白檀の香をまといて寝よう

この春は幸せひとつ見つけたい明日むすめも誘ってみよう

コントラバスの調べ

印出 美田紀 神奈川

ポケットのはだかのコインも鳴るだらうアコーディオンの蛇腹の風に
風が湖へゆつくり漕ぎ出だすやうにコントラバスの調べはじまる
鳥の声聞いてをりたるハルニレか傾ぎしままに菩薩に彫らる
観音の肌衣に鑿の痕残されて木が存へてゐる

まとひたる苔もろともにくすの木は肌のかけらをさくつと離す

怒

り

前中

映東京

いつせいに黄金の落ち葉が降つてきて天変地異のやうな夕暮れ

ごめん今電車の中とささやいた男の会話がまだ終はらない
人を怒りまた怒りそしてみづからを怒りて下る夜の神楽坂
電線をわたる鴉の足音が聞こえるほどのしづけさだつた
早送り早送りしてひとたびも笑へぬまに(Mー)終はる

みな春の音

吉田 真弓 北海道

春植ゑの球根届く少しだけ風が優しくなりたる朝に
高き音低き音あり家々の軒から落つるしづくの音は
ちよろちよると雨水榊へと流れ入る春を知らせて雪解け水は
さわさわと川へと流るる水の音響いてゐるか遠き山でも
軒からのしづく落つる音舗装路を走る車音もみな春の音

コウノトリ公園

石田 信 夫* 鳥取

景色よりまたわが家もはがれ落ち過疎地の隙間はさらに広がる
葉脈が静脈のごと波打ちて冬甘藍は破裂寸前
老い母の世過ぎの一つ淡々とデイケアに行く車に乗りぬ
豊岡の市バスはチェックのカバン柄コウノトリ公園へ我を運びぬ
最中ひとつ百四十円四十銭 慶応四年創業の店

溜息

樋田 由美* 三重

春の夜に溢れて零るる溜息を掌に受け飲み干しており
春ゆえに風は優しく微笑んで街の古びた遮断桿揺る
幼児らと遊びたかったか春雨は 滑り台や鞆も空
雨の中黄水仙持ち佇んだ少女が一人誰かを待ってる
多いのか少ないのか解らない三百人の感染者数

茨 城 弁 水 辺 あ お 静 岡

長生きは博打のごとし見たくなきもの見て逝くか見ずに逝けるか
誰も持つ逆鱗なれど触れられて怒れぬ歳に入りてしまひぬ
笑顔にて握手してすぐ手を洗ふごとき(謝罪)をまた聞かざる
ふるさとの茨城弁で思ふかな「政府はごじやつべつつかすだつべ」
十年が経ちても更地まざまざと(ただ祈るしかない)といふ嘘

桜 まん かい 山 本 辰 雄 長 崎

教会のさくらは満ちて鐘楼の古びしドームに花びらが落つ
桜花みごとに咲けば平成に吞み食ひせしをことごとく言ふ
隣屋に地酒入荷ののほり立てば早々一本買ひて来たれり
「千歳鶴」といふ純米酒冷やさずにさつそく吞みて桜まんかい
家売りに遠くに行きし隣家の庭に咲きたる凌霄花

暁 月 夜 太 田 い ず み * 兵 庫

空檻からおりの阪急電車はきよらかな灯り曳きゆく疫病えびの町まちを
疫病の覆う住処ぞ楽園を追われしアダムとイブの末孫ゴキウ
怪獣より群れ逃げまどう昨夜の夢ワカリヤスイヤツと言われる
冬の鳥ひそりと松に同化して鳴かない飛ばない灰色の鳥
ウルフムーンの光射し入り呼ばれたることく目覚めつ 暁あかとき月夜つきよ

日 本 で 学 ぶ 高 橋 光 子 * 静 岡

新茶香るこの町が好きと日系人スエミのスピーチ滞りなく
四十歳過ぎてひらがなカタカナを学ぶマリサはかなりのパニック
ミャンマーの苦学生らは十年を日本で学びデモに立ち上がる

プラカード笑顔の動画送り来る教え子達の無事祈る日々
ケータイのニュースをヤングンに送りやれば「死者の数が少ないです」

お 水 取 り 河 本 洋 子 * 奈 良

雛祭り消毒液を待まちらせて雛すまし顔大和郡山
早春の比良の山裾広がりに琵琶湖におちこち鯰なまこ立ち見ゆる
山陵の小道辿ればかすかすかかすか幼鷺木の間にホ・ホ・ホ
夕暮れを近鉄列車ゴーゴーと平城宮跡横切りて行く
古都奈良に春を呼ぶとお水取り練行衆の松明走る

け さ の 雪 掻 き 阿 部 則 子 北 海 道

だいらさまの音色優しき土鈴雛かたみとなりてはや十六年
高齢のマンション暮し多いらし冬の雪掻きその辛さゆゑ
わが丈をすでに越えたる雪山に目がけて放るけさの雪掻き
こんもりとなりし雪道あらあらつるりと滑り(へ八の字)に坐る
大雪は十年ぶりと言ふひと日疲れを癒すけふの長風呂

花 粉 症 の 鼻 黒 川 典 子 愛 媛

川底に眠れる鯉のねいきをも聞こゆる如き満月の夜
濃き淡き緑の芽吹く川岸に黒鯉の親子にゆわり口開く
逆光に光るお堀は水皺立ち枝垂れ柳の影に消えゆく
花粉症の鼻をくすぐる散歩道白木蓮の並木の続く
母逝きてもう十年か梅の花は咲き渡るとも実家庭さびし

五 目 寿 司 牧 好 恵 東 京

日脚のび心も少し軽くなる大きな琵琶湖おもふゆふぐれ

当り前がふつうに出来ぬこの春も雛はほほゑみ華やぎあたり
手際よく母の作りし五目寿司玉子をちらして菜花をちらして
外出なきアクセサリーを並べ見る楽しかつたなあの日あの時
陶製のアリスのそばに置いてみる義兄の形見の懐中時計

バス停ふたつ

川添良子*神奈川

咲き満ちて白梅ひと枝夕庭の浮寝のごとき明かりさびしも
侘助のぼりとひとつまたひとつうす紅愛し直土の上
乳飲み児の微笑むような水仙の花のさ揺らぐ歩道あたらし
咲き揃うラッパ水仙朝の道歩幅ひろげて腕ふりあるく
まだできることを掲げて自らを褒めつつ歩くバス停ふたつ

脳内地図

尾形久子 群馬

いつよりか脳内地図よりぬけおちて迷路となりぬ町なかの道
信号のみとこころ先も青になり鼻歌いでてアクセルからし
床を打つ長なはとびの音の絶ゆ体育館のふかきしづけさ
八重咲きのクリスマスローズのひらき初む愛でぬし母の逝きて八年
夫と我のレクリエーションと名付けたる気つけ薬のやうなるけんか

草原の守り

新屋希子 熊本

軒下のシャツをくすぐる春の風阿蘇の野焼きの焦げ香ふくみて
取りこめる洗濯物に草木の灰がつきをり野焼きの季節
おのおのに火消し道具を腰につけ勇み野に入る草原の守り
枯れ色の野を赤竜は走りたり黒く焦げゆく早春の阿蘇
「還暦を迎へた今も若手です」野焼きを終へしひとは語りぬ
花の名を君に問はれし日もありき 春竜胆は咲いただらうか

美化クラブ

五十嵐 トシエ 新潟

サンダルに素足の若き医師の手は夫の治療をてきはき熟す
再発は杞憂とわかり気も軽く今日の晩酌多くとも良し
橋の上行つたり来たり二往復今日のノルマの五千歩クリア
デザートを注文するも忘れられ際限もなくおしやべり続く
美化クラブ立ち上げし夫町内を散歩のたびにゴミ拾ひくる

十年の歳月

小林 仁 序 長野

安曇野に避難してきて生まれたる友の男の子は十歳となる
十年の歳月を経て廃炉すら手づまりのままフクシマは在る
小高にはもう還れぬとなげく友 黒き袋の山と積まれて
原発さへなければ直ぐに立ち上がり希望持てたと被災者の声
ふるさとへ還れぬ人のあまた居て未だ原発の稼働を言ふか

点滴の腕

白谷 明 美*福岡

「体内のミステリーをば見ようかね」老医師に言はれ検査入院す
八桁の患者番号と生まれし日手首に巻かれ病室へ行く
病室の広き眼下に沈みいる菓箱のごとき博多のビル街
四人部屋さわらぬほどの小声にて励ましあいぬ検査のあれこれ
空遠く帰る鴉を点滴の腕を伸ばして見送る夕べ

ペンペン草

栢 弘 子 山口

三味線の鳴りはじめむか道の辺のペンペン草は実をさはに付け
うぐひすの二声三声ききしより裏山しづもる良き日にあらむ
すきとほるやうなる肌のおもふ明け方の月見上げてをれば

白鳥しろとりのあまた小枝にとまりゐて木蓮近く開かむ気配

〔白〕は湯気(米)は稲穂をあらはすとぞ術後の粥をつつしみて食ふ

紙の鍵盤 渡辺京子 宮崎

葉書の葉何の葉ならむ(多羅葉)と初めて知りぬ八十七で

多羅葉の葉裏にピンで文を書き孫へ送りぬ封筒に入れ

月光に尺八の音の聴こえきぬ父吹きてゐし「荒城の月」

終戦の翌年入りし女学校 紙の鍵盤でピアノ弾きにき

わが作りし八小節の「春の歌」みなで唱ひきお下げ揺らして

古 歌 橋本武則*大阪

落暉燃え水平線上柔らかき陸の翳りの淡路島見ゆ



「その二集」特選

ぬるい風 山田菜々子*栃木

職場用NOTITYに朝いちまいのぶくぶくシールしんげんに貼る

皿を拭く。まっくろな道カーブしてあなたは彼と星をみている

そういえばはじめて見せる涙だな パナナミルフィユぱつきりと割り

牛乳にオレオは落ちて戻れない瞬間ばかりスローに見える

ぬるい風 つぎの人にもおなじ頃おなじ曲を教えるんだね

ひなた雨降る冬の日虹消えて山肌蒼くたそがれてゆく

夜の橋を渡る列車は一日の澱落とすごと音響かせて

古歌読みて眠れる夜は赤人の(鶴)鳴きわたる浦に遊べり

老耄の先は短しさはあれどコロナワクチン効くは嬉しも

休止符 中村京兵庫

さざんくわのあかき花びらちらし発つ話し相手にならぬ鴨

み柩に眠れる姑のふところこそつと差し込む丹色の帛紗

あさあさに雪見障子を擦り上げて姑の遺影にまねく朝日子

返し縫ひ・玉止めせずと教はりてははの納骨袋を縫ひぬ

次つぎにわれにおこりし哀しみをやさしくかくすコロナのマスク

弟の死は冷酷なボディ・プロロー もう駄目へなへな休止符打つね

春だなあ 清水美里*東京

パックから取り出す卵大きいと「春だなあ」って声に出し言う

春雨のしづく幾千枝につけ既に咲いてるみたいだ桜

くくくく背中を折って横たわるりんご八片オーブンで焼く

脱ぎ捨てて投げてよこしたジャンパーの内側の熱もうすぐ七歳

ばら組の日々あと僅かはつはるの振っても振っても砂の出る靴

夕陽 三村幸子 兵庫

春風を胸いっぱい充たしては鐘つく僧のうつしみ淨き
平和とは水切りかごに伏せられたムーミン谷の絵柄のカップ
さりげなく心をこめて丸形の絵文字を添へるお祝ひメール
あかつきの列車を待つは既に旅一番線のプラットホーム
日能研のNの鞆が駆けてゆき歩道橋より眺める夕陽

別れの場面 高橋 梨穂子*新 潟

斜め読みしている本の空白にひらく雪原 別れの場面
かさぶたのはげたところにじむ血を薔薇の刺繡のハンカチで拭く
凹凸をちゃんととらえる指先で耳の裏まで塗る日焼け止め
陽を浴びてつばみふくらむ川岸で鴨もまあるくうたた寝をする
うつぶせで終える一日右耳を押しあて地球の鼓動を探す
目元しか知らない人もいい人と信じるそうやって生きていく

喜 寿 丸山 克介 鹿児島

〔耳にたこの話〕のたこが吸ひ付きぬ三密・マスク・手洗ひせよと
アメリカの未来を語る女たち金柑漬をはほりながら
〔喜寿いまだ上り坂なり〕と思へども吾が家の前の坂道険し
荷を抱き向かふ三軒配り終へ吾が家に寄らずクロネコが行く
岩風呂の岩に凭れて爺四人寄らず喋らず湯気に揺れをり
密さけるために小窓を開けをれば湧くこと一気に火山灰の吹き込む

永遠の旅路へ 人見 江一*神奈川

震災のあの日あの時いた場所と咄嗟の行動明暗わかつ

初めての歌会に出れば父のこと歌友ふたりが思い出語る
宮柊二と安立スハルと父写る古い写真は亡き人ばかり
啄木の歌記された木のハガキ函館土産が歌との出会い
天空に Return to forever 響かせてチック・コリアは永遠の旅路へ

アモス・オズ 奥 浩 昭 東京

閉塞の今思ひ見るアモス・オズ「ピース・ナウ」なる理想掲げし
民族の共存願ひピース・ナウ運動始めしユダヤ人オズ
ヘブライ語の「オズ」は力なりオズが一生追ひ求めたる平和の力
「アモス」には重荷の意ありアモス・オズ力もて重荷を負ひし人
いくたびか候補となれどノーベル賞受くることなくオズは逝きたり

母のじゃんけん 小野 久美子*兵 庫

パレットの隅に残れる乾いた朱いつか描きし夕焼けのかけら
外来に同姓同名の患者いて診察券に貼られる赤丸
カチカチとノックする度シャーペンにはコンマ5ミリのポが出てる
親指と人差し指で作るチョキ母のじゃんけん真似て懐かし
赤い月漆黒の空に張り付いていちもくさんに畦道駆けたり

手を振る 上野 成*新 潟

グググッと嘴つよく土にうめ餌さぐるらし水田の白鳥
田のおい水の匂いをきき分けて雪消えし野を散歩するなり
オーイオーと声上げ見らの手を振るにつられて手を振る二両電車に
ラビットのキャラクター付けし電車から手を振る客の三、四人見ゆ
五歳児は牛のまつ毛を見つけたと牛舎に入るなり驚きて言う

ホーミーの声 森野樟子*千葉

「稻わらの火」の紙芝居見たりしが現^{うつ}つとなれり半世紀経て
恥ずかしき「想定外」の嘘っぱち 命落とすはいつの世も他人
アルタイの森に住む人縦笛を吹きつつ歌うホーミーの声に
思春期の我わくわくと探しいき松下竜一朝日歌壇に
豆腐屋と短歌の二足の草鞋はき歌を詠みしはたった七年

米菓業 竹内ほなみ 新潟

父が起し夫が継ぎたる米菓業七十五年の歴史を思ふ
ロゴマークの一新をせり創業の志継ぐ息子に託す
搗臼は手水鉢とし碾臼は飛石として庭に据ゑ置く
残雪はまだ多けれど雛壇を納めて桜の花枝飾る
絵も軸も花も桜にかへたれば家内明るみ心弾めり

山 椿 樺 かの 広島

山椒を揺さぶり起こす風吹きて芽吹きを急かす春はうるさい
整へた髪にむちやくちや触れてゆく海風の吹く駅までの道



大輪のまつ赤な椿と私のはつと目が合ふ路地の塀越し
生きてるか確かめに来たと娘言ひわが家見廻し饅頭さし出す
山畑の道のあたりに山椿が意地はつてゐる花首晒し

歩くプール 福田春子 福岡

サンルームに空のもやうを窺ひて家籠りする弥生のひと日
籠る日はテレビに習ふかんたんな御数ひとつをキャベツで作る
表面に見えざる傷みうちに秘む真つ赤なりんごふたつに割れば
腕かかげ歩くプールの春の水のたりのたりと身にまとひくる
水掴みプールを歩く春の宵でのひら ひらりと水明りして

微細な元素 松本道代*熊本

車椅子押す手をとめてながめるは銀に耀う雨後のねこやなぎ
如月に雪は降りてもすぐ消ゆるはかなきものをまた一つ見て
初節句に求めしひいなも色褪せて嫁がざりし娘も老いてゆくなり
逢引と言うなつかしき言葉さく卒寿を祝う老女の口から
ここかしこ痛むこの身の覚束な末は微細な元素となるに

竹のささやき 田中由紀子 長崎

闘ふべく軍鶏は命飼はれみて太き蹴爪に草の穂ひかる
街川の干潟に残る夕明り集めて白き鷺のひと群
欄間より冬陽ざし来て花活くる吾が手に遊ぶほのあたたかく
たはむれに耳を寄すれば竹群の竹のささやき梢より伝ふ
噴水の散るかたちして一叢の萩の白花ゆるる山寺